

3.

# 国際シンポジウム・ セミナー

---

2022 年度 国際シンポジウム・IGS  
セミナー・研究会詳細

## ► 2022年度 国際シンポジウム・セミナー概要

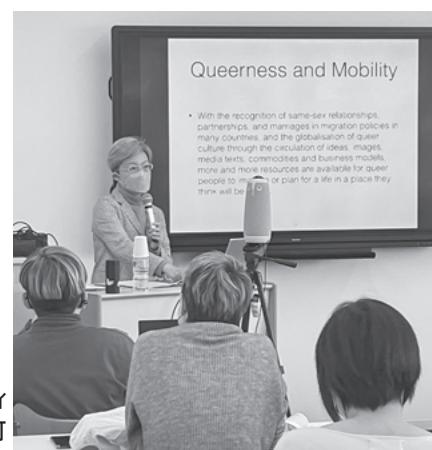
2022年度はIGS国際シンポジウム1件、IGSセミナー8件、研究会1件を主催したほか、共催国際シンポジウム2件、後援イベント1件を開催した。詳細は次頁以降を参照いただきたい。

IGS主催国際シンポジウム	
リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27頁
IGS主催セミナー	
The Marcos Return: What Does it Mean for the Philippines?	30頁
フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか	31頁
19世紀米国女性のインター・セクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャー・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか?』(1851)を例に	33頁
日本（と世界）における性的マイノリティの政治	35頁
クィアな出路か 新たなクィア／モノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスマショナルな移動可能性（モビリティ）	37頁
「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973)再考	39頁
家電と暮らしのポリティクス	41頁
クィアする現代日本文学—ケア・動物・語りとジェンダー	43頁
IGS主催研究会	
IGS研究協力員研究報告会	45頁
共催国際シンポジウム	
東アジアにおけるジェンダーと政治代表	47頁
「ガラスの崖」をよじ登る：「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁	48頁
IGS後援イベント	
日本フェミニスト経済学会2022年度大会 フェミニスト経済学からみた政治・権力——家父長的世帯主義批判	49頁



国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」

IGSセミナー「家電と暮らしのポリティクス」



IGSセミナー「クィアな出路か 新たなクィア／モノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスマショナルな移動可能性（モビリティ）」

## ► 2022 年度 主催国際シンポジウム詳細

### IGS 国際シンポジウム

### リプロダクティブ・ジャスティス

### 妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く

【日時】2022 年 12 月 20 日（火）16:00~19:15

【会場】

ハイブリッド開催（共通講義棟 2 号館 201 室、Zoom ウェビナー）

【パネリスト】

イケモト・リサ・C（カリフォルニア大学教授）

「ロー判決・ドブス判決後の米国におけるリプロダクティブ・ライツ／ジャスティス」

岩本美砂子（元三重大学教授）

「政治右派+宗教右派と反リプロダクティブ・ライツ（日本）」

※登壇予定であったペク・ヨンギョン氏（済州大学校）は欠席

【コメンテーター】

高谷幸（東京大学准教授）

飯野由里子（東京大学大学院特任准教授）

大橋由香子（「SOSHIREN 女（わたし）のからだから」メンバー）

宝月理恵（お茶の水女子大学特任講師）

【総合司会・趣旨説明】申琪榮（IGS 教授）

【モデレーター】本山央子（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】グローバルリーダーシップ研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】308 名

【趣旨】

本シンポジウムは「リプロダクティブ・ジャスティス」の概念を切り口として、妊娠・中絶・再生産の自己決定を可能／不可能にするのは何か、法・政治・社会運動はどのように関わってきたのかを米国及び日本の専門家らと議論することを目的に開催された。第一部のパネリスト報告では中絶を巡る米国最高裁の判決や日本におけるリプロダクティブ・ヘルス／ライツの課題について報告がなされた。第二部では 4 人のコメンテーターから「リプロダクティブ・ジャスティス」を捉える多様な視座や取り組む上での課題についてコメントがあり、ディスカッションが行われた。



## 【開催報告】

冒頭で、本シンポジウムの企画者である申琪榮氏が次のような開催趣旨を述べた。——妊娠・中絶・再生産をめぐる女性の決定やそれを保障する医療、公的サービスは基本的人権であるが、歴史の中で女性のからだや再生産能力は常に権力によって占有が争われてきた。2022年にアメリカ最高裁は、人工妊娠中絶の権利の法的根拠となってきたロー対ウェイド判決を覆す決定を下した。また日本では刑法の墮胎罪が未だに存在している。特に近年は、ジェンダー、人種、セクシュアリティなどが交差する抑圧の中で女性は分断されており、個人の「リプロダクティブ・ヘルス（性・生殖・再生産をめぐる健康）」や「リプロダクティブ・ライツ（性・生殖・再生産をめぐる権利）」のみならず、それを阻む構造自体に目を向ける必要性がある。本シンポジウムでは上記の問題意識から「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」の概念を切り口として、妊娠・中絶・再生産の自己決定を可能／不可能にするのは何か、法・政治・社会運動はどのように関わってきたのかを米国及び日本の専門家らと議論したい。

第一部のイケモト・リサ・C氏からの報告では、まずリプロダクティブに関する3つのフレームワークが提示された。本シンポジウムのテーマであるリプロダクティブ・ジャスティスは、女性の中絶権利に焦点を当てたリプロダクティブ・ライツの限界から登場し、学術概念であると同時に社会運動の概念として発展してきた。その中心には社会的不平等への注視、インターフェクショナリティ概念の使用、コミュニティ団体の重視がある。次に報告ではアメリカの中絶権利を左右してきた最高裁判決についての説明があった。1973年のロー対ウェイド判決は、中絶を「プライバシーの権利」として位置づけ「ジェンダー平等」の保護として認めたわけではない。しかしながら同判決は女性が自分の身体への自立や管理を確保する上で重要な意味を持ってきた。こうした状況は2022年のドブス対ジャクソン女性健康団体判決により中絶の禁止・規制が可能になったことで、大きく変化しつつある。イケモト氏は、ドブス判決は保守派判事が最高裁の過半数を占める政治情勢を反映したものであり、保守派の特徴としてキリスト教、新自由主義、連邦主義への支持があること、また判決によって現在アメリカは中絶をめぐる「内戦」状態になっていると指摘した。同判決により、中絶禁止州における希望しない妊娠継続の強制、妊娠全般の医療ケアの縮小、妊娠・中絶犯罪化の拡大が懸念されている。また、将来的には避妊方法や同性婚などプライバシー権利に係る他の判決にも影響をもたらす可能性がある。こうした不安な状況への希望として、最後にイケモト氏は中絶擁護州におけるサービス提供拡充の動きや、インターフェクショナリティの視座に立脚した性と生殖と再生産をめぐる人権の尊重を要求するリプロダクティブ・ジャスティス運動も広まっている状況を挙げ、中絶のみならず多様な社会正義の問題に連携して取り組むことが喫緊の課題であると指摘した。

2人目のパネリストである岩本美砂子氏からは、日本のリプロダクティブ・ヘルス／ライツの状況とそれに対する宗教右派・政治右派の攻撃について包括的な説明が提供された。まず岩本氏は、日本におけるリプロダクティブ・ジャスティスの重要な課題として日本軍戦時性奴隸制の問題が未解決なことを挙げ、政府の謝罪・賠償が不十分であると同時に、右派が事実や歴史認識を歪曲してきた実態を指摘した。また過去には、優生保護法に基づき強制不妊手術が行われてきた事実があり、法による障害者やトランクスジェンダーの人々へのリプロダクティブ・ライツの侵害は現在も課題となっている。さらに、日本の妊娠・出産・避妊・中絶は医療保険によってカバーされず、医師会が中絶に関し絶大な影響力を持つとともに、使用できる避妊方法も限定されている状況がある。こうした状況において性教育の推進は重要だが、日本の性教育は世界的に遅れており、その背景に宗教右派・政治右派によって攻撃を受けて

きた経緯がある。性教育へのバッシングは 2000 年代に顕著であり、右派による性教育攻撃は結果として日本の性教育の委縮に繋がった。性教育批判の中核には女性の性的自己決定権への敵対視があり、地方政治と結びつきながら優生保護法「改正」運動、選択的夫婦別姓批判、LGBTQ 権利否定などの反リプロダクティブ工作が続けられている。特に個人より家族を優先する「家庭教育支援条例」は国政レベルでの憲法改正の布石になる恐れがあるため、幅広い連携によって阻止する必要がある。最後に日本におけるリプロダクティブ・ライツ及びジャスティスの推進に向けて、中絶要件や費用の緩和、避妊方法の拡大とともに、歴史的課題として日本軍性奴隸制と優性保護法が犯した不正義を政府に賠償するよう要求することが不可欠であるとして報告は締めくくられた。

第一部のパネリスト報告を踏まえ、第二部では 4 人の専門家から以下のコメントが寄せられた。まず、高谷幸氏からは両報告ともに国家レベルの宗教右派の政治的影響を懸念していたことを踏まえ、国家レベルの政治とリプロダクティブ・ジャスティスを考える際に「ネイション（国民）の再生産」も関与するのではないかと問題提起がなされた。そして、日本の代表的な移民女性である国際結婚女性と技能実習生の身体管理・自己決定が侵害されている状況について説明がなされた後、ネイションの再生産は経済的グローバル化の中でどのように変化しているのかという質問が報告者になされた。

次に、飯野由里子氏からはまず、リプロダクティブ・ジャスティスはリプロダクティブ・ヘルス／ライツに代わる「新しい言葉」ではなく、3つは切り離しがたく結びついている点が強調された。そして実質的なリプロダクティブ・ヘルス／ライツの獲得のためには、リプロダクティブ・ジャスティスを踏まえた社会変革が重要であり、日本では入国管理制度や移民労働者の権利運動にも取り組むべきことが指摘された。さらに近年は保守主義と女性運動の接近も見られており、リプロダクティブ・ヘルス／ライツは障害者の自由や権利の問題でもあるとして、その射程を広げていく必要性が提起された。

3 人目の大橋由香子氏からは、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの定義が日本では分かりにくいものに留まっていること、また中絶を犯罪と見なす発想が日本社会に根強く、女性が罰せられる状況に繋がっていることが課題として指摘された。さらにリプロダクティブ・ヘルス／ライツと併せてジャスティスも日本では定着していないことが問題提起され、その理由として日本でジャスティスというと国家が押し付ける父兄長的なイメージがあること、またマジョリティ女性の状況すら悪いことが挙げられた。今後は全体の底上げと格差の縮小に向け、排除の論理に陥らず幅広い運動がリプロダクティブ・ジャスティスを徹底させ、その実現に向けて連携が必要であると述べられた。

4 人目の宝月理恵氏からは、日本の近代以降の人口管理に係る政策は一方で人口の再生産を促進すると同時に、他方で不良な子孫や生産力のない国民を排除する二面性を有しており、これらの人口政策はバイオ・ポリティクスの表れと認識しうるという指摘がなされた。そして、プロライフかプロチョイスかという二項対立は、中絶を個人の意識と強固に結びつけて内面的な動機を形成するバイオ・ポリティクスの側面から捉えなおす必要性があるのではないか、また今後どのような教育・啓発を行うべきか、という問題提起がなされた。

質疑応答ではイケモト氏に対し、ドブス判決以前からアメリカの中絶をめぐる状況は悪化していたが、それでも同判決が重要であるのはなぜか、アジア系アメリカ女性の連携における課題や可能性、アメリカにおける配偶者要件について質問がなされた。またイケモト氏から日本における医師の役割について質問があった。日本とアメリカの対比の中で、リプロダクティブ・ジャスティスを考える様々な切り口が提供され、連携して取り組む必要性が再認識されシンポジウムは閉幕となった。

記録担当：高橋麻美（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

## ► 2022 年度 主催 IGS セミナー詳細

### IGS セミナー

## The Marcos Return

### What Does it Mean for the Philippines?

【日時】2022 年 6 月 20 日（月）15:00～16:00

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

#### 【講演】

Jean Encinas-Franco（フィリピン大学教授）

#### 【ディスカッサント】

Jan Robert Go（フィリピン大学准教授）

#### 【モダレーター】

Ki-young Shin（IGS 教授）

Ella Syafputri Prihatini（ビナ・ヌサンタラ大学講師）

#### 【主催】ジェンダー研究所

#### 【言語】英語

【参加者数】16 名

#### 【趣旨】

The Philippine presidential election drew the attention of many. The elected is the son of Marcos, the dictator who was overthrown by people's power during the democratization in the 1980s, and the vice president is the daughter of an authoritarian president. Why did the Philippines choose them as national leaders? Prof. Jean Encinas-Franco talks about this puzzle and what the result of the presidential election means for the Philippines.

She reviews the current status of political economy in the Philippines and focuses on the generation gaps in perspectives on the past political history. Prof. Encinas-Franco emphasizes a new role of SNS in the political campaign of these newly elected leaders.



## IGS セミナー（学内限定）

# フェミニズム出版と運動 共感と啓蒙をどう繋げるのか

【日時】2022 年 7 月 28 日（木）15:30～17:00

【会場】人間文化研究科棟 408 室（対面）

【ゲスト】

山田亜紀子（雑誌『シモーヌ』編集者）

【司会】

小嶋里菜（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

花岡奈央（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

【主催】ジェンダー研究所、「フェミニズム理論の争点」ゼミ

【言語】日本語

【参加者数】21 名



## 【開催報告】

2022 年 7 月 28 日（木）、IGS セミナー「フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか」が、所属教授申琪榮氏の担当する「フェミニズム理論の争点ゼミ」との共同で開催された。ゼミ受講者小嶋里菜氏、花岡奈央氏の司会により、雑誌『シモーヌ』編集者山田亜紀子氏の報告と事前アンケートをもとにしたトークセッションが行われた。

はじめに企画者である申氏から開催の経緯が説明された。申氏は IGS の刊行する学術雑誌『ジェンダー研究』の編集長としての経験などから、学術的な論文では広くリーチできるものが書きづらいと感じていた。そんな中「雑誌感覚で読めるフェミニズム入門ブック」として刊行されたことで注目していた『シモーヌ』への寄稿依頼を山田氏から受けた。そこで、フェミニズムの書き物を制作する思いや困難などについて知るべく山田氏に依頼をし、本セミナーが実現した。

続いて山田氏より、まず『シモーヌ』の概要が報告された。『シモーヌ』は 2019 年 11 月現代書館より創刊され、創刊号特集はシモーヌ・ド・ボーヴォワールであった。『シモーヌ』というタイトルは、運動と連帶していた時期があった 3 人のシモーヌ、ボーヴォワール（哲学者）、ヴェイユ（Weil、哲学者）、ヴェイユ（Veil、政治家）からとった。男女二元制から脱却し、多様な性を包括するフェミニズム媒体を目指し、ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」からもう一步踏み出してジェンダーを考えていこうという気持ちではじめた。フランス寄りの雑誌を企画した理由として、自身がフェミニズムに触れるきっかけになったのは映画監督アニエス・ヴァルダであり、ヴァルダとの繋がりからボーヴォワールを知ったこと、日仏女性研究学会に所属などしていること、また韓国や欧米のフェミニズムはすでに多く翻訳されていたことをあげた。第 4 号までは人物特集を行なっていたが、時事問

題を取り扱うには限界があるように感じテーマ特集を試みたところ好評を博した。テーマ特集の方が入りやすいのではないかと考え、当面はテーマ特集にシフトする。

次に『シモーヌ』をつくりたかった背景として山田氏は、ボーヴォワール『第二の性』(1949) 刊行から70年を迎えること、そしてSNS台頭による第4波フェミニズムの盛り上がりをあげた。特にTwitterは多様な声を可視化する重要なツールであり、自身も運動には使用している。しかしTwitterでの議論には限界を感じており、自身が音楽や映画からフェミニズムに入りその後に本を読むことで深まった経験から、SNSでフェミニズムに興味を持った人に活字に触れてほしいと考える。だが大学に通っていない人にとって学術書などはどの本から手に取って良いかわからないため、理論書、古典、名著に触れるきっかけとなるような媒体を目指したいと考えた。さらに書店員として女性向けのフロアにてフェミニズム、ジェンダーの選書も行なっていた経験を『シモーヌ』の制作で活かすことができるとも考えた。書店員をしていた当時、フェミニズム関連の本でもタイトルにはフェミニズムと入れないほどにフェミニズム関連の本は売れなかつた。さらに学術書、理論書は刷り部数も少ないため高額となり、扱う書店も限られていた。しかし近年、マララ・ユサフザイ氏のノーベル平和賞受賞や、SNSの台頭、海外のフェミニズムの盛り上がりにより、エッセイ、翻訳などのフェミニズム関連書の出版が増えた。また書店員の志が売り場に反映されるような独立型のセレクト書店でフェミニズムの棚が増え、多様なフェミニズムが歓迎される土壤ができたことが『シモーヌ』制作の意欲へと繋がつた。創刊にあたっては雑誌が今時売れるのかという懸念が社内にあったが、文芸雑誌や翻訳における近年のフェミニズムの盛り上がりをアピールした。企画が通ったのは、比較的小さな出版社ゆえ編集者が自由にできるところがあったためではないかと考える。

報告の最後に山田氏は『シモーヌ』が目指していることを語った。山田氏は共感と啓蒙について次のことに着目する。山田氏によれば、1975年に田中美津氏や米津知子氏らが参加していたミューズカル“おんなの解放”におけるスローガン「啓蒙より共感、怒りより笑い」にはリブ／運動の人たちが共感を大事にしていることが現れている。また天皇制反対の立場を明らかにし風刺も行うなど、今のフェミニズムとの志の違いが見られる。そして1980年代後半から90年代前後、運動側と研究側の関心にずれが出てきた。研究者中心で男女共同参画が進められるなど、市民啓蒙が重視され、女性学・ジェンダー学者の情報が力を持つようになった。山田氏はフェミニズムの広がりには共感（多様な生と性の可視化）が、またフェミニズムの差別への加担の気づきなど深めるには啓蒙（多様性を排除しないための知識）が共に必要であり、その両者を行き来する媒体を目指し『シモーヌ』を編集しているとした。

トークセッションでは、『シモーヌ』は学術書よりは手に取りやすいものの入門としてはハードルが高く感じられるなどの意見が寄せられた。山田氏によれば、共感と啓蒙両方の文章が入っていることで、難しく感じた部分も後に思い出してもらえることに意義がある。さらに同時に全ての人にわかってもらおうとする必要はなく、時間差でも連帯が広がっていくことが大事である。また昨今のトランス女性排除言説などにはフェミニズム媒体として抗議し続けていきたいし、何かしらのアクションが必要だと考えている。山田氏は、アカデミアにいる人には色々な情報にアクセスできる特権が、編集者には本をつくり頒布できる特権が、あるとする。そして例えば社会的弱者とされている人が声を上げると誹謗中傷に遭い孤立しやすい状況が続いているため、安全な環境で対話ができるイベントなどを開催する重要性を指摘した。他に今後の『シモーヌ』やフェミニズム運動の展開について様々な意見が交わされ、セミナーは終了した。

記録担当：伊奈留偉（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

## IGS セミナー

# 19 世紀米国女性のインターフェクショナルなアイデンティティとメディア理論 ソジャー・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか?』(1851)を例に

【日時】2022 年 7 月 29 日（金）18:00～19:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

### 【講演】

マーシー・ディニウス（デポール大学准教授／フルブライト招聘教員）

【司会】戸谷陽子（IGS 所長）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】52 名

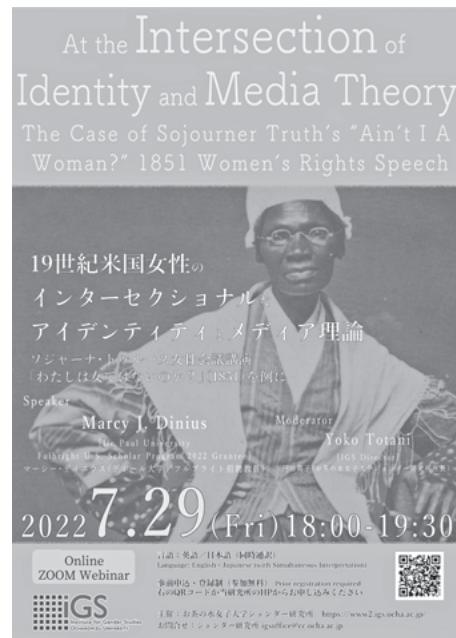
### 【趣旨】

アフリカ系アメリカ人の女性活動家ソジャー・トゥルースが 1851 年オハイオ州の女性会議で行った講演「わたしは女ではないのか？」は、非識字者による、録音技術無しの講演だったことから、臨席者それぞれの「記録」により複数のテキストを生み出すこととなった。現存する主な二つのテキストから、複数のアイデンティティとメディアを多次元的に「利用」し目的を推進したトゥルースの人物像を、インターフェクショナル理論と、インターメディア理論を通じて検証する。

### 【開催報告】

2022 年 7 月 29 日、IGS セミナー「19 世紀米国女性のインターフェクショナルなアイデンティティとメディア理論—ソジャー・トゥルース女性会議講演「わたしは女ではないのか?」(1851)を例に」がオンライン開催され、マーシー・ディニウス Marcy Dinius 氏（デポール大学准教授／フルブライト招聘教員）が、アフリカ系アメリカ人女性活動家のソジャー・トゥルース Sojourner Truth (1797 ? -1883)が 1851 年のオハイオ州女性会議で行った演説「わたしは女ではないのか?」("Ain't I A Woman?")を取り上げ、初期の白人主導フェミニズム批判として検証され、最近では詩の形態に翻訳・修正されて合衆国国内で広く読まれているこの演説を、インターフェクショナリティ理論とインターメディア理論を通じ、複数のアイデンティティとメディアが交差する重要な例として考察した。

ディニウス氏はまず、インターフェクショナリティの定義を、研究者／活動家のクレンシュー Kimberlé W. Crenshaw (1959～) が提唱した、「政策と背景構造が交差する中で、複合的なアイデンティティが形成され、一連の困難と好機を生み出す状況のすべて」と紹介し、この観点から以下の議論を進めた。



女性、アフリカ系アメリカ人、活動家、作家など複数のアイデンティティを持ち、非識字者であったトゥルースの演説を復元する方法はなく、臨席した記者の「記録」や観客の記憶から成るテクストは、その後再形成されやすいものとなった。特に重要な文字テクストとして、二つのテクスト（ロビンソン Marius Robinson 編集稿・新聞 *Anti-Slavery Bugle* 1851 年掲載、ゲージ Frances Dana Gage 編集稿・1862 年 *New York Independent* 紙および *National Anti-Slavery* 紙の両方に掲載）が挙げられる。

この二つのテクストには大きな違いが見られる。“Ain’t I A Woman?”の題で広く知られることとなつた 1862 年ゲージ版は、当時の多くのアフリカ系アメリカ人が話すアフリカと米国南部のアクセントが混ざった方言で表記されている。トゥルースは、ニューヨーク州で当地入植者が使用したオランダ語を第一言語とする奴隸として、オランダ語のアクセントが強い英語を話したとの証言があり、ゲージ版編集に際し、政治的な意図が働いた事実を示すものである。一方、ロビンソン版は、トゥルースを元奴隸と紹介しているが、黒人であることを強調する表現はなく、有名な「Ain’t I A Woman?」のリフレインも存在しない。

米文学の正典を納めた *The Norton Anthology of American Literature* の最新版は、非識字者人物としてトゥルースを紹介し、ロビンソンのテクストを掲載している。ロビンソンを著者の一人と言及することも、トゥルース自身はゲージ版を好んだという事実の言及もない。

1875 年に出版された *Narrative of Sojourner Truth, A Bondswoman of Olden Time*（トゥルース自伝の最終版）には、本人の意志によりゲージ版が収録されている。オーガスタ・ローバック Augusta Rohrbach は、これはトゥルースが「検証可能なアイデンティティとしてではなく、記憶の構築としての作家性を強調した」結果であり、彼女が「あらゆる素材を自由に利用し、それを証言として位置づけ」、「記憶の構築」を個人の行為ではなく「共同体の」営為として理解していたためとしている。

他者との協働で制作した本や画像を自作として販売することで、トゥルース自身もアイデンティティを更新しつつ生活と政治活動の信条両方を支えていたといえる。*The Norton Anthology* はトゥルースの演説を採用することで正典の対象を拡大したが、トゥルースが印刷物よりもオラリティを、単独著者よりも共同作業を戦略的に選んだという重要な事実を問題化することはなく、アフリカ系アメリカ人文学の歴史において、コラボレーション、コピー、その他の非オリジナル、非印刷の作家性がいかに重要な意味をもつかを示す機会を逸している。

最後にディニウス氏は、ウェブサイト <https://www.crmvet.org/poetry/ftruth.htm> 上で読者が複数の著者による演説テクストを比較検証できるように掲載したステッソン Erlene Stetson の試みに言及し、ステッソンによる加筆を含め、それを可能にする開かれたトゥルース演説テクストの柔軟性を評価した上で、現在このような形で論議されるトゥルース演説は、彼女が現代の有能なメディア論客と同様、技術的にも理論的にも複雑な思想家であり、アイデンティティ、メディア、権力がどのように交差し相互作用するかをしたたかに利用し、自身の目的を推進していたことを裏付けるものであると結論した。講演終了後、ディニウス氏へ多くの質問や感想がよせられ、リモート講演にもかかわらず、会場は講演参加者全体による、さらなる講演内容やテーマの深化と広がりを共有する活気ある場となった。

記録担当：書川美香（お茶の水女子大学大学院博士前期課程比較社会文化学専攻）

## IGS セミナー（学内限定）

# 日本（と世界）における性的マイノリティの政治

【日時】2022 年 11 月 9 日（火）18:30～20:00

【会場】ハイブリッド開催（人間文化創成科学研究所棟 408 室、Zoom ウェビナー）

### 【講師】

青山薫（神戸大学教授）

「Sexual Minority Politics in Japan (in the World)」

【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】18 名



### 【開催報告】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所（IGS）は、2022 年 11 月 9 日に IGS セミナー「日本（と世界）における性的マイノリティの政治」をハイブリッドで開催した。神戸大学教授の青山薫氏を報告者として招聘し、司会は IGS 特任講師の嶽本新奈が務めた。このセミナーは、IGS とタイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology: AIT）により毎年実施されている国際研究交流プログラム「AIT ワークショップ」（本報告書 62 頁）の一環として行われたもので、AIT から来日中であった交換留学生 2 名も参加した。

青山氏は、「性をめぐる問題は政治的である：フェミニストの遺産」、「国民国家：個人的なものに呼応する市民権と人権」、「市場とピンクウォッキング：親密さの商業化と性的なものの脱政治化」、「行為者としてのセクシュアル・マイノリティ：変化を為す者」、「研究・考察に求められる繊細な感性」という 5 つのトピックを通して、講演テーマであるセクシュアル・マイノリティのポリティクスについて次のような報告を行った。

#### 1：性をめぐる問題は政治的である：フェミニストの遺産

青山氏はまず、17 世紀にキリスト教が罪人と定義した「同性愛者」の誕生について解説した。19 世紀、同性愛は犯罪化され、病理化された。20 世紀まで、産業社会の中核をなす中産階級の間では、同性愛は「間違い」であり、異性愛は「正しい」という考え方が一般的であった。資本主義社会においては、中産階級家庭の生殖機能は欠くことができない主要な構成要素であることから、ゲイ、レズビアン、トランスジェンダーの人たちへの偏見の一因となったと考えられる。生殖だけでなく、ケアも含めた家族の本当の機能についても詳しく説明された。この 2 つの役割は、女性（妻や母）が愛の労働として無報酬で行っていたのである。これらのことから第二波フェミニストの多くは、セクシュアリティを含む個人の選択はまさに人権であり、政治的な問題であると提起してきた。

## 2：国民国家：個人的なものに呼応する市民権と人権

次に青山氏は、LGBTQ の市民権や人権にかかわる「同性婚」に焦点をあてた。一部の国では同性婚は合法化されているが、日本では同性カップルのパートナーシップ証明書はあっても、同性婚は法律で禁じられている。同性婚を合法化すべきかどうか、同性婚の合法性を否定することが違憲であるかどうか、議論が続いている。“21世紀の国家は、LGBTQ の権利を人権として捉えているのだろうか？”，青山氏はこう問い合わせた。

## 3：市場とピンクウォッシング：親密さの商業化と性的なものの脱政治化

日本を含め、多くの国で LGBT がブームになっている。第3パートで、青山氏はこの現象を支持と懸念の2つの側面から捉えた。"LGBT" の権利は守られるべきだが、ピンク・ウォッシングや LGBT トピックの過剰な商業化も憂慮されるべきである。親密さの商業化は現在、世界中で起こっており、LGBT のトピックは簡単に大きな収益を上げることができる。しかし、多くの実質的な人権（ジェンダー不平等、貧困問題、レイシズムなど）を尊重する視点と問題意識が抜け落ちているのが現状である。

## 4：行為者としてのセクシュアル・マイノリティ：変化を為す者

第4パートで青山氏は、LGBT 当事者たちが社会の変革者として活動する際に、"LGBT" ブランドを活用することのメリットとデメリットを列挙した。メリットは、"生き残る"、"権利の前進"、"人生のチャンスを増やす"、"対等な市民や人間になる" などに集約される。デメリットは、"新自由主義の強化"、"マイノリティの忘却"、"権力の乱用"、"他者の搾取" であった。

## 5：研究・考察に求められる繊細な感性

最後に青山氏は、セクシャル・マイノリティの政治について研究・考察する際には、繊細な感性を働かせてほしいと提起した。例えば近年、(LGBT の中で) "G" (のみ) を主流化していく傾向に対して、他のマイノリティはどのように対応するべきか。私たちは、政治的、経済的、人口動態的、文化的、地理的、民族的、言語的、地域的、宗教的に異なる環境で何が起きているのかを注意深く繊細に考察すべきであると結ばれた。

講演の後は活発な質疑応答が交わされた。多くの参加者から質問が寄せられ、青山氏は回答を通じて今回のセミナーの内容をさらに深めた。

記録担当：江天瑤 Tianyao JIANG (お茶の水女子大学大学院博士課程) (訳：嶽本新奈)



## IGS セミナー

# クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか 中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）

【日時】2022 年 12 月 9 日（金）15:00～16:30

【会場】国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室

【報告】

ルセッタ・カム（香港浸會大学文学院准教授／2022 年度 IGS 研究協力員）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】25 名

【開催報告】

2022 年 12 月 9 日、お茶の水女子大学内国際交流留学生プラザ 3 階 セミナー室にて、IGS セミナー「クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）」が開催された。香港浸會大学文学院准教授であるルセッタ・カム Lucetta Kam 氏がスピーカーとして参加した。

冒頭においてカム氏は、2005 年から 2011 年にかけて行っていた上海のララ（クィア女性を意味する）たちのエスノグラフィー研究の延長として、中国に出自を持つクィア女性の国境を越えたモビリティに関するプロジェクトに取り組んでいるということを説明した。このプロジェクトを通じ、カム氏は中国から他国に移動するクィア女性たちの人生、クィアとしての自我、願望をとらえるとともに、現時点で中国にいる新たな世代のクィア女性たちの国境を越えた移動の可能性を議論し、その出現のありかたをめぐって新たな知見を広げようとしているという。

カム氏は本調査の協力者を、「クィア」のアンブレラ・タームの下でとらえた。調査協力者のセクシュアリティは、レズビアン、バイセクシュアル、フルイド、パンセクシュアルなどが含まれた。またジェンダー・アイデンティティについては、女性、H（中国語文化圏において男性でも女性でもないジェンダー・アイデンティティを指す）、P（中国語文化圏におけるフェミニンなレズビアン女性）、T（中国語文化圏におけるマスキュリンなレズビアン女性）、クィアなどが含まれた。この把握の下でカム氏は「クィア・モビリティ」を、中国に出自を持つクィアな中国人女性が一時的または永続的に国境または大陸を越境し、他国・他地域に滞在することを指す概念として論じていった。

カム氏は調査において、ジェンダーとセクシュアリティ、そして地理的なモビリティをめぐるインター・セクショナリティに着目し、「どのようにして移動可能性は解放的あるいは規制的な力学として働くのか、どのようにセクシュアリティは移動可能性に影響を及ぼすのか、クィアな人々の移動可能性にかのひと彼人のジェンダーはどのように作用するのか」といったリサーチクエスチョンを立ててきた。中国では 2015 年から 2018 年にかけて調査を行い、2022 年からは香港でも同様の課題に取り組んでいる。香港



のケースについては継続的に調査を行っている途上であるという。

近年、同性間のパートナーシップや同性婚にもとづいて移民を受け入れる国が出てきたり、クィア・カルチャーのグローバルな広がりが進んだりしていることで、クィアな人々は越境によってより良い生活を獲得できる可能性を具体的にイメージしたり、実際に渡航を計画したりできるようになった。国境を越えた移動・移住の可能性は、母国かつ受け入れ国での人種、セクシュアリティ、階級、ジェンダーとポスト植民地主義、(クィア) グローバリゼーションなどをめぐる在り様によって形作られている。

クィア女性たちの海外への移動の実践は、ポスト社会主义中国におけるコスモポリタン的自己の追求という文脈において、あるいは社会的に望ましい行動規範という文脈において理解されてきた。これをふまえつつ、カム氏は、国境を越えた移動可能性は、コスモポリタンとして、またポスト社会主义国としての中国において、新たなホモノーマティヴィティ、すなわち善良なクィアである（になる）べきだという価値観の生産に寄与していると指摘した。

中国から国外に出ることを、中国語で「出國」(chuguo)<sup>チュークオ</sup>という。カム氏によれば、「出國」には「明るい未来の追求」のような意味合いがある。若い都会のエリート層または中間層にとって「出國」は望ましい生き方であり、階級と文化資本を上昇させるライフコースととらえられている。クィア女性たちにとって、一般的な「出國」は人生におけるステップアップであるとともに、セクシュアリティやジェンダーをめぐる違和を感じることなく生活することを可能にする。それゆえに彼ららは「出國」を一つの手段として選択するようになる。移動可能性は、彼ららのセクシュアリティとジェンダーにとって居心地の良さを獲得するための交渉において必要なのである。

トランスナショナルに移動するクィア女性たちは、セクシュアリティとジェンダーにおける自律性と社会的尊厳を手に入れようとする。新自由主義社会において国際的な教育、観光、グローバルな就労の機会が広がるというとき、クィアたちは自律性と尊厳を得るためにルートを新たに手にしている。

カム氏は2013年の論稿において、人びとがゲイやレズビアンである以前に「普通」である必要があるという認識の政治性をとらえ、“Politics of public correctness” 「公共的正しさの政治」という概念を提起した (Kam 2013)。「公共的に正しい」人間であるということは、法的に立場を認められた市民となること、そして社会経済上「生産的」であり、従順な娘であり、「健康」で「明るい」という、ホモノーマティブな幻想に適合するホモセクシュアル的なモデルに近づくことを意味する。都市エリート層の若者たちが国境を越えたモビリティ、あるいは「出國」<sup>チュークオ</sup>を実現していくというとき、クィアな主体はそのような公共的正義の政治に組み込まれている。この意味において、トランスナショナルなモビリティは中国におけるホモノーマティヴィティの新たなモデルとなっているのである。

カム氏は最後に、実際に行った調査事例の内容をいくつか紹介した。調査協力者たちの年代やパートナーシップの状況、居住地域、就労状況などはさまざまで、データに富み、これまでカム氏が紹介した概念を補強するとともに、参加者にとって非常に理解がしやすくなっただろう。

カム氏の発表の終了後には質疑応答が行われた。質疑応答では複数人から質問があり、盛り上がりを見せた。また現在まさしく進行中であるという香港における調査についてもカム氏から話していただくことができた。

本セミナーでは会場がほぼ満員となるほど、注目を集め、非常に充実した時間となった。

文献：Kam, Lucetta Yip Lo., 2013, Shanghai Lala: Female Tongzhi Communities and Politics in Urban China (Queer Asia): Hong Kong University Press.

記録担当：駒村日向子（お茶の水女子大学博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

## IGS セミナー

# 「棄民」を記録する 今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973)再考

【日時】2023 年 2 月 17 日（金）14：00～16：00

【会場】ハイブリッド開催（国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室、Zoom ウェビナー）

### 【報告】

片岡佑介（一橋大学ほか非常勤講師／立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託員）

嶽本新奈（IGS 特任講師）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】63 名

### 【趣旨】

映画監督・今村昌平は、1971 年より一連のテレビ・ドキュメンタリーの制作に着手する。「棄民シリーズ」と題されたこの中編群で、未帰還兵の取材のために訪れた東南アジア各地にて、今村は元「からゆきさん」の日本人老女たちに出会う。そして完成したのがドキュメンタリー『からゆきさん』(1973) である。この映像作品は、実際の元「からゆきさん」の女性たちを映像に記録している一方で、今村の劇映画の延長線上にあり、今村作品のジェンダー表象を再考するにあたっても重要な位置を占める。本セミナーでは、「正史」から捨象されてきた元「からゆきさん」の経験や記憶が今村による『からゆきさん』でどのように「記録」されているのかを、映画学と歴史研究双方の側面から読み解く。

### 【開催報告】

本セミナーは、映画監督・今村昌平によるドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973 年) を題材に、「からゆきさん」と呼ばれた明治・大正期に身一つで海外へ「出稼ぎ」に向かった日本女性たちの表象とその意味を、歴史研究と映画学から考察したものである。ドキュメンタリー映画『からゆきさん』冒頭 15 分程度を視聴した後、映画学・表象文化学から原爆映画の研究を専門とする片岡佑介氏と、ジェンダー史学から「からゆきさん」研究を専門とする嶽本新奈氏が講師として登壇し、ドキュメンタリー映画『からゆきさん』を紐解く考察や論点が報告された。

歴史学の視点から嶽本新奈氏は、「キクヨさん」の波乱に満ちた生涯を概観したうえで、「棄民」というキーワードに注目する。今村にとっての「棄民」とは日本の近代化から置き去りにされた人々であり、『からゆきさん』は女性たちの「怨嗟」の声を記録することを目的としたわけだが、実際、今村は自身が期待する「怨嗟」を女性たちから引き出すことに失敗している。その背景として、嶽本氏は、森崎和江



による「流民」という概念と比較し、今村は元「からゆきさん」の生そのものには関心を寄せていないかった点を指摘する。今村による「棄民」は国民国家的思想に基づいており、今村が期待する「怨嗟」は国家、資本、権力といったマクロな構造から「捨てられた」という認識を持たなければ発せられることはないものである。一方、元「からゆきさん」が語る「怨嗟」は、親や楼主、買春者などのミクロな人間関係に対して向けられており、今村の問題関心の範囲ではくみ取ることができない。嶽本氏はミクロレベルの女性たちの語りにマクロな構造が連関している点や、作り手である今村自身も家父長制的構造等、マクロな構造から自由であるわけではない点を指摘した。

次に、片岡佑介氏は映画学の視点から『からゆきさん』の映画としての側面に注目する。下層社会の人々に焦点を当ててきた今村作品にはふたつの特徴がある。一点目は、女性の性を通じて日本の近代・前近代を批判的に把握する点、二つ目はドキュメンタリーという方法論である。片岡氏によると、前者については、『からゆきさん』でも従来と同様の枠組みのもと、日本の海外膨張政策との関係の中で元「からゆきさん」の生涯が語られており、後者については、1960年代から既存の映画を刷新する方法とされた「ドキュメンタリー」という手法を『からゆきさん』でも採用し、記録として残してきた「社会的出来事」と、記録されることのなかった「女性の性的体験」という対比の中で映像が編集されたという。加えて、片岡氏は、今村が女性たちの性にのみ焦点を当てることで、被占領国の男性作家に特有の言説に陥っていると指摘する。『からゆきさん』では「キクヨさん」の生涯が図式的に編集され、映像の終盤になるにつれ、「キクヨさん」は「語る存在」から、元雇用主や地元の人間、そして今村によって「語られる存在」へと追いやられている。しかし、片岡氏は、無言で口ごもる「キクヨさん」の声こそがもつ記録としての可能性についても提示した。

報告後の質疑応答では、今村を含む戦後の前衛的な男性作家のポジショナリティの無自覚さや、作品における植民地の歴史やエスニシティの視点の欠落、カメラマンなど撮影者の視点の重要性など多岐にわたる議論が交わされた。

記録担当：大野聖良（日本学術振興会特別研究員（RPD）・神戸大学）



## IGS セミナー 家電と暮らしのポリティクス

【日時】2023 年 3 月 13 日（月）15:00～17:00

【会場】ハイブリッド開催（国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール B・C、Zoom ウェビナー）

### 【報告】

村瀬敬子（佛教大学社会学部教授）

「家庭電化と家事労働のポリティクス：高度成長期における宣伝・広告を中心に」

岩島史（京都大学大学院経済学研究科講師）

「戦後農村における家電の普及とジェンダー：高度経済成長期を中心に」

【ディスカッサント】大橋史恵（IGS 准教授）

【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】99 名

### 【趣旨】

私たちの日常においてどのような家電製品がどう普及するかという問題は「パーソナル」そして「ドメスティック」であると同時に非常に「ポリティカル」である。1983 年にルース・シュウォーツ・コーワンがその著書『お母さんは忙しくなるばかり』（法政大学出版局）において論じたように、19 世紀から今日に至るまで、電化製品の技術開発から商品流通までの過程は、国家による基礎的なインフラストラクチャーの整備や産業政策の推進の歴史と強く結びついてきた。コーワンの研究はそのようなテクノロジー・システムの下で、家電の技術革新によって家内労働が多様化・複雑化したこと、「清潔さ」や「健康」をめぐる責任がジェンダー化されていったことを描き出した。

本セミナーでは、日本の政治経済秩序の変化の下での「ドメスティックな」労働関係の変容について、家電を基軸に、ジェンダーの視点から読み解いていく。日本社会では高度経済成長期に非農林業における雇用が急拡大し、その反面で女性の就業が減少し「主婦」が拡大していったことが知られる。こうした変化において家電がどのように普及したのかを、農村部と都市部の差異やその意味にも目を向けながら、あらためて議論していく。

コーワンの研究から 40 年経った今日でも、テクノロジーが暮らしを楽にするという言説は広く流布し、消費者の欲望を喚起し続けている。家電と暮らしの政治経済史を批判的にふりかえることで、私たちがどのような局面を生きてきたのかを確認することを目指したい。

### 【開催報告】

2023 年 3 月 13 日、IGS セミナー「家電と暮らしのポリティクス」が開催された。お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任講師の嶽本新奈氏による司会の下、佛教大学社会学部教授の村瀬敬子氏、京都大学大学院経済学研究科講師の岩島史氏が登壇し、お茶の水女子大学ジェンダー研究所准教授の大橋史恵氏がディスカッサントを務めた。



第一報告（村瀬）「家庭電化と家事労働のポリティクス：高度成長期における宣伝・広告を中心に」では、家庭電気器具が急速に普及した高度経済成長期の前半である、1955~1965年を中心に、家庭電化と家事労働がどのように語られ、表象されてきたのかが論じられた。村瀬氏は〈家庭電化による女性解放、民主化〉という言説は、どのような論理により成立したのか、また家庭電化が家内において誰の意思決定によってなされたのかを、当時の宣伝活動・広告表現から検討した。

「家庭電化」という言葉は1920~1930年代にマスメディアに多く登場しており、戦前の「家庭電化」においても、主婦が電気器具を用いて主体的に家事をする様相が描かれてきた。戦前においても家庭電化の普及を目的とした博覧会等が複数回開催されたが、その背景には、昼間の電気需要開拓の必要性があった。博覧会の展示において、家庭電化を行った家庭は、「衛生的」で「能率的・合理的・科学的」な家事がなされ、主婦が修養し新知識を学べるため「文化的」であると表象された。

戦後の〈家庭電化による女性解放、民主化〉言説は、国の根幹にかかるエネルギー政策に結びついて展開した。1949年に設立された家庭電気文化会は、電力会社や家電メーカーからに加えて、女子大教授、農林省の行政官なども理事に加わり、いわば国を挙げて家庭電気器具の奨励をした。ここでは「婦人の民主化は家庭の電化から」と位置づける一方で、家庭電化の導入によりできた時間をどう使うべきかについて「主婦」に対する強い規範がみられた。また家庭電化の広告の分析では、洗濯機や炊飯器といった家電製品が夫や戸主から妻や嫁に「与えられるもの」として表象されていることが指摘された。

第二報告（岩島）「戦後農村における家電の普及とジェンダー：高度経済成長期を中心に」では、家電普及の社会的プロセスについて、広告は誰のどのような欲望を喚起したのか、また洗濯という労働過程の全体において、家電の導入は農家世帯の労働（関係）の何をどのように変化させたのか、という点が着目された。日本の農村では都市部と違い、1960年代に農業（稻作）の機械化と並行して急速に家電が普及した。農村に最も普及していた雑誌である『家の光』は、戦中・戦後の紙不足もあり、従来広告に否定的な評価をしていたものの、1950年代後半以降は協同組合の雑誌として家電の広告も掲載するようになった。洗濯機の広告に関しては「アメリカ式生活の担い手」的側面を強調するよりも、機能面が強調され、著名な大手電気企業だけでなく、農業機械の製作所が動力脱穀機や精穀機と一緒に、電気洗濯機の広告を全国の農機具店で扱っているという文句で掲載していた。

第二次大戦後の農村民主化において政策的に推進された生活改善普及事業のなかでは、洗濯の頻度や量・時間等が調査され、洗濯が「しごと」として認められるようになると、共同洗濯機の導入が進んだ。同事業においては洗濯は洗濯機により省力化するが、その分炊事や掃除により手をかけたいという方向性があり、浮いた時間をそれらや会合などに回した場合には「忙しくなる」可能性はある。岩島氏は、洗濯の労働過程のみでなく、女性の労働全体を見る必要があると指摘した。この時期の日本農村では、洗濯機の共同利用だけでなく、洗濯という家事そのものが共同化された例もある。つまり近代的な科学技術の導入は新たな労働の共同性を一時的にせよ創り出した可能性があるとした。

二つの報告を受け、ディスカッサントの大橋氏は、私たちの日常において、どのような家電製品がどう普及するかという問題は「パーソナル」であり「ドメスティック」であると同時に非常に「ポリティカル」であること、また「ドメスティック（国内の）」に見えることが、「グローバル」な政治経済秩序につながっている可能性もあるのではないかとコメントした。大橋氏は事例として、戦後香港における日本製家電の普及と家事労働者の雇用の関係に言及しながら、グローバルな政治経済秩序においてテクノロジーが女性の「ドメスティックな」役割を強化したという可能性を示唆した。

記録担当：駒村日向子（お茶の水女子大学博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

## IGS セミナー 『 クィアする現代日本文学 ケア・動物・語りとジェンダー』

【日時】2023 年 3 月 20 日（月）14:00～15:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【報告】

武内佳代（日本大学教授）

【司会】

戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】116 名

【開催報告】

本セミナーでは、2023 年 1 月に刊行された『クィアする現代日本文学—ケア・動物・語り』（青弓社）の著者である武内佳代氏をお招きし、各章ごとの成り立ちや趣旨など概要を語っていただいた。同書では、クィア・フェミニズム批評を中心に、動物やケアなどをめぐる批評理論を横断的に用い、金井美恵子、村上春樹、田辺聖子、松浦理英子、多和田葉子という 5 人の現代作家の作品が論じられている。これらの作品について批評を試みる際、著者が強く意識したのは「当事者」的な立場をとらないこと、また、作家に関する情報や理論的な枠組みではなく、あくまでも「小説を読む」ことに力点を置くことであると武内氏は述べる。セミナーは、武内氏による報告のち質疑応答の時間が設けられ、聴衆との意見交換がなされた。

武内氏はまず、同書を書くことになったきっかけとして、「お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」（2003 年～2008 年の文部科学省採択事業）との関わりが大きいことをあげる。同プログラムのプロジェクト D（理論構築と文化表象）の研究員をつとめたことで、学内外の研究者の思想的枠組みから大きな刺激を受けることとなり、その際の関心が同書の土台となっていることが改めて確認された。

それぞれの章は、「クィア批評を多様なかたちで試みる」という問題意識と、「小説を読むことの意味を問う」という問題意識とに貫かれていると武内氏は強調する。第一章では、金井美恵子の「兎」に登場する無性の語り手「私」の様態を、思弁的なクィアネスとして読み込んでいる。この論考を構想中、三島由紀夫文学のレズビアン表象に関する論を執筆するなかで、レズビアン女性についての社会学的調査を考察することと、小説表現としてのレズビアンについて読みとくことの差異を認識することとなつたという。女性研究者であっても、小説を読むときには女性であるという当事者性や、父権的で権威的



な「男性作家」というバイアスをいったんわきに置き、作品を丹念に読むことの必要性に思い至ったことがあかされた。

また、社会的に「見えない」ものとしてある非規範的なジェンダー・アイデンティティが書き込まれている小説に関心を向ける武内氏は、一人の読者として「クィアする」という介入を行うことで、こうしたアイデンティティやセクシュアリティをめぐる問題が可視化される批評的読解作業に心惹かれるという。第二章から第四章まで村上春樹の小説作品が扱われるなかで、フェミニズム批評の観点から批判的に読まれてきた『ノルウェイの森』を扱った第二章では、女性たちの同性愛セクシュアリティが前景化されることとなった。第三章では、「レキシントンの幽霊」の登場人物がゲイであることに着目しエイズ文学として読みなおすことで、不可解だった登場人物の孤独の意味に気付くこととなる。「七番目の男」をトラウマ論と男性性研究の観点から読み直した第四章では、明確な描写がないにもかかわらず、性暴力被害を受けた男性の姿が立ち上がることになった。

かつて F-GENS が実施したシンポジウムをきっかけに、障害学やケアの倫理について学び、改めてフェミニズム批評の観点から小説分析に取り組んだことは、第五章の田辺聖子の「ジョゼと虎と魚たち」の分析につながっている。さらに松浦理英子の『犬身』が論じられた第六章では、登場人物間に相互依存するケアの倫理の関係をみたうえで、犬と人間との相互依存をクィアな関係として解釈できるとする。第七章では、多和田葉子の『献灯使』における曾祖父と曾孫のジェンダー化されないケアの倫理に基づく関係性を指摘し、障害的でクィアな曾孫らの身体は、再生産を前提とした異性愛主義的な資本主義の価値観のオルタナティブを表象するものであるとした。

武内氏による報告に区切りがつけられたのち、司会の戸谷陽子 IGS 所長が、1980 年代から 90 年代、エイズ危機渦中のニューヨークでクィアを生きようと試みたアーティストらの状況に言及しつつコメントを述べた。本セミナーには、学生や日本文学研究者のみならず、広く学内外から、ジェンダー問題に関心のある 116 名以上の聴衆が参加したことから、報告終了後には、小説と虚構性との関連、動物の観点からの扱いの他、読者同士の読みの営為などに至るまで数多くのコメントや質問が寄せられた。小説テクストを「クィアする」読み解きによって改めてさまざまな可能性が浮かび上がることとなり、なおかつ登壇者である武内氏のクィア／フェミニズム／ジェンダー批評研究者としての立場性に触れる貴重な機会となったと考える。自分なりに小説を読み直してみたいと思う方々には、ぜひ同書を紐解いていただきたい。

記録担当：洲崎圭子（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所研究協力員）



## ► 2022 年度 主催 IGS 研究会詳細

### IGS 研究会

## IGS 研究協力員研究報告会

【日時】2023 年 3 月 17 日（月）10：00～12：30

【会場】オンライン開催（Zoom ミーティング）

#### 【報告】

板井広明（専修大学准教授）

「ミソジニーとフェミニズム」

仙波由加里（ドナーリンク・ジャパン）

「生殖補助医療に関する法律の欠如がドナーリンクに及ぼす影響と課題」

平野恵子（横浜国立大学准教授）

「ギグ・エコノミーと再生産労働に関する研究動向」

佐野潤子（慶應義塾大学アインシャル・シェロトロジーセンター特任講師）

「既婚女性の資産形成：日本とノルウェーの比較から」

#### 【挨拶・コメント】

戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

#### 【司会】

嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】15 名

#### 【趣旨】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所では研究所に在籍している研究協力員に自身の研究紹介も兼ね、研究報告することを義務付けています。2022 年度は板井広明氏、仙波由加里氏、平野恵子氏、佐野潤子氏の 4 名が当研究所の研究協力員として研究活動を行い、その研究成果報告として 2023 年 3 月 17 日に IGS のメンバーや学内研究者に向けてそれぞれの研究について報告した。

#### 【開催報告】

2023 年 3 月 17 日、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員研究報告会を開催し、2022 年度の IGS 研究協力員であった板井広明氏（専修大学）、仙波由加里氏（ドナーリンク・ジャパン）、平野恵子氏（横浜国立大学）、佐野潤子氏（慶應義塾大学）の 4 名が報告した。

板井氏は「ミソジニーとフェミニズム」というタイトルで報告した。今回の報告は 2022 年に出版されたシーラ・ジェフリーズ『美とミソジニー：美容行為の政治学』（慶應義塾大学出版会）を取り上げ、こ



の著書に通底するトランス差別的な立場の来歴とその論理の再確認を行うという趣旨であった。まずはトランスジェンダーをめぐるリベラル・フェミニズムとラディカル・フェミニズムの思想を紹介し、次いで現在の日本社会におけるトランス差別とそれに抗する言説を紹介した。トランス差別的な言説は一部のフェミニスト達からも発せられており、それにどのように応答するべきなのか、参考になるだろうと思われる複数の著書を示しつつ、インターフェクショナリティ概念の重要性を強調された。

仙波氏は「生殖補助医療に関する法律の欠如がドナーリングに及ぼす影響と課題」というテーマで、自身も立ち上げに関わった一般社団法人ドナーリング・ジャパンの活動を通して見えてきた課題について報告した。ドナーリングとは、生殖補助医療で生まれた人と過去に精子や卵子を提供したドナー、または同一のドナーから生まれた人同士を結び付ける（リンクする）ことを指すが、その際にはドナーの提供時の情報や出生者の親が提供を受けた際の情報、さらに出生者の情報やその情報開示が必要となる。近年では「出自を知る権利」を法律で保障している国も増えてきているが、日本ではまだドナーの法的立場を明示する法律が存在しない。仙波氏は、法律の欠如による諸問題を紹介し、日本における法律の整備とドナーリングへの社会的理解の深まりの必要性を提起した。

平野氏は「ギグ・エコノミーと再生産労働に関する研究動向」というテーマでインドネシアのギグ・エコノミー領域における家事労働者について報告した。ギグ・エコノミーとはプラットフォームを介して行われる労働であり、「ギグ」とは狭義には臨時・随時の雇用形態を指すことばである。平野氏は、ギグ・エコノミーをめぐる先行研究の論点を整理し、かつては二重労働論における第二次労働市場として「女性化（feminized）」されていたギグ・ワークが社会的備給プロセスの中で主流に移行してきたことを紹介した。こうした流れを踏まえた上で、インドネシアのギグ・エコノミー型家事労働者の状況とインタビューを参照しつつ、ギグ・エコノミー型家事労働者と一般的な家事労働者の比較をし、社会保障の有無や意識の差異を通して序列化・切断化される家事労働者たちの現状を提示した。

佐野氏は「既婚女性の資産形成：日本とノルウェーの比較から」というテーマで報告した。超高齢化社会を迎えて老後の人生に備えるための資産形成の重要性が高まる中、夫婦それぞれの名義資産の格差が存在している。佐野氏はこうした夫婦それぞれの資産格差の要因にジェンダー意識が関係するのではないかと日本とノルウェーの比較調査を行った。夫婦間の資産格差には年齢や学歴、収入などの影響に加えて家計の意思決定を妻が担っていることも重要な要因であるというドイツの先行研究を紹介し、日本の調査ではこれに準ずるという結果だったが、ノルウェーは全くそうした変数が格差につながっていないことを実証的に示した。家計の意思決定を妻がもつと資産格差が低くなるという日本の場合、それは収入の多寡ではなく性別役割分業に根付いており、性別役割分業を担うことが夫婦間の金融資産額の格差につながっていることが指摘された。

4人からの非常に興味深いテーマとそれに関連する問題提起に、参加者の間からも様々な質問やコメントがあがり、非常に意義のある討論を展開することができた。最後にジェンダー研究所所長である戸谷陽子教授より報告会についての総括の言葉が述べられた。

記録担当：嶽本新奈（IGS 特任講師）

## ► 2022 年度 IGS 共催国際シンポジウム詳細

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクト

# 東アジアにおけるジェンダーと政治代表

【日時】2023 年 1 月 13 日（金）17:30～20:00

【会場】上智大学 2 号館 414 号室

### 【報告】

Ki-young Shin, Ochanomizu University

Chang-ling Huang, National Taiwan University

Jackie Steele, enjoy Japan K.K.

Wan-ying Yang, National Chengchi University

Soo Hyun Kwon, Korea Women's Political Solidarity

Mari Miura, Sophia University

Kenneth Mori McElwain, University of Tokyo

Tomoki Kaneko, University of Tohoku

### 【ディスカッサント】

Sara Childs, University of Edinburgh

Gregory Noble, University of Tohoku

【主催】WONDER Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation

【共催】ジェンダー研究所

### 【協力】

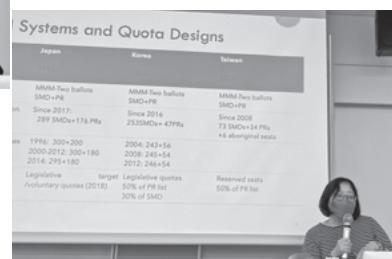
科研費基盤研究 B (18H00817) 女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査（代表：三浦まり、分担者：申琪榮）

科研費基盤研究 C (19K12604) ジェンダークオータの政治学:制度化と抵抗（代表：申琪榮）

【言語】英語

### 【趣旨】

An international research group organized by scholars and activists in Japan, South Korea, and Taiwan, WONDER (Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation), has conducted elite surveys in the past years to explore commonalities and differences of elites' perceptions on barriers into politics, policy preferences, and gender quotas among three Asian democracies. The International Symposium presents the major findings of the research and proposes further research agendas.



ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同

## 「ガラスの崖」をよじ登る 「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁

【日時】2022年12月23日（金）16:40～19:00

【会場】ハイブリッド開催（お茶の水女子大学共通講義棟2号館201室、Zoomウェビナー）

【開会挨拶】

戸谷陽子（お茶の水女子大学教授・ジェンダー研究所長）

【登壇者紹介】

小林誠（お茶の水女子大学教授・グローバルリーダーシップ研究所長）

【発表】

ミッシェル・ライアン（オーストラリア国立大学教授）

「『ガラスの崖』とは？—高リスクにおける女性リーダーの役割」

小久保みどり（立命館大学教授）

「危機の時のリーダーの選択—『ガラスの崖』と作動性リーダー」

ヘレン・ピーターソン（エレブルー大学（スウェーデン）教授）

「『ガラスの崖』は越えられる？—スウェーデンの高等教育における女性リーダー」

【コメント】岡村利恵（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【閉会の挨拶】石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）

【司会】大橋史恵（お茶の水女子大学ジェンダー研究所准教授）

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構 グローバルリーダーシップ研究所 ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】121名



開催報告書はグローバルリーダーシップ研究所より以下のリンク先にて、2023年11月に公開される予定である。

<https://www.cf.ocha.ac.jp/igl/j/menu/publication/d009813.html>

## ► 2022 年度 後援イベント

### 日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会

### フェミニスト経済学からみた政治・権力 家父長的世帯主義批判

【日時】2022 年 7 月 9 日（土）10:00～18:00

【会場】早稲田大学早稲田キャンパス 14 号館 4 階 401 教室

【座長】大橋史恵（お茶の水女子大学）・板井広明（専修大学）

#### 【報告】

藤原千沙（法政大学）

「プロヴィジョニングの経済学と個人・世帯・社会政策」

申琪榮（お茶の水女子大学）

「政治権力はどのように再生産されるのか：政治資本としての家父長的イエ」

キム・イルジュ（早稲田大学）

「「母親国民」と「非国民」：フィリピン人結婚移住女性の市民権と政治参加に関する日韓比較研究」

清水奈名子（宇都宮大学）

「東電福島原発事故とジェンダー：被害を増幅させる要因としての格差と差別」

#### 【討論】

足立眞理子（お茶の水女子大学）

金井郁（埼玉大学）

小ヶ谷千穂（フェリス女学院大学）

落合絵美（岐阜大学）

【主催】日本フェミニスト経済学会

【共催】早稲田大学平和学研究所

【後援】お茶の水女子大学ジェンダー研究所、早稲田大学ジェンダー研究所

